

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780440

研究課題名(和文) 学校統廃合にともなう地域変容の具体的検証と複層的コミュニティの構想

研究課題名(英文) A Concrete Examination of Local Community Transformation Associated with School Consolidations and Plans for Multi-stratified Communities

研究代表者

丹間 康仁 (TAMMA, Yasuhito)

帝京大学・教育学部・講師

研究者番号：10724007

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学校統廃合の実施によって地域がどのように変化するかを具体的な次元に掘り下げて検証した。学校統廃合が実際に行われた地域を対象として、地域の表現形式である校名と校歌の変更の状況および地域活動の中止や創造の状況を調査した。これにより、学校と地域に関わる多様な主体が地域の表現形式に教育的な意図を組み込もうとする動きを捉えて、閉校に向けた過程を閉校後の地域づくりの過程に連続させる動きを明らかにした。学校統廃合後の持続可能な地域づくりのために、学校教育と社会教育を自律的に整備して、旧学区と新学区の複層的なコミュニティを構想する方策を提起した。

研究成果の概要(英文)： This study concretely looked into the changes that local communities went through by the implementation of integration and abolition of schools. For the areas that actually involved in integration and abolition of schools, I investigated how the school names and songs which are the expression of localities changed and how the local activities were canceled or created. Thus, I gave light on the activities where a variety of subjects related to schools and communities tried to incorporate educational intention in expressing localities and to link up the processes before closing down of the school with the improvement of the community after closing down. I presented, for a sustainable community improvement after school integration and abolition, the measures to design both the school education and the social education in an autonomous manner and to plan the new school district together with the old school district in a multi-stratified manner.

研究分野：教育学

キーワード：学校づくり 教育環境 学区 校名 校歌 地域活動 芸術文化

1. 研究開始当初の背景

人口減少社会に転じた日本において、教育学研究の重要な課題の一つとして学校統廃合が挙げられる。年少人口が減少する動向のもとで、学校教育の環境を整備しようと、学校適正規模・適正配置の議論が進められている。一方で、地域社会において学校が果たす役割や機能は看過できないものであり、単に子どものためという論理で学校統廃合の議論を成り立たせることは困難な状況にある。

こうしたなかで、学校の統合や廃止が地域にもたらす影響の解明が求められている。しかしそれは、学校統廃合の実施によって地域のシンボルが喪失して住民の精神的な拠り所が消失するという観念的な把握に留まっている。学校統廃合の実施によって、地域から具体的に何が消えて何が残ったかという変容の実態は、これまで十分に解明されてきたとはいえない。

そこで、学校統廃合に対する教育学研究の多角的なアプローチの一つとして、学校教育の条件をどのように整備していくかという研究のみならず、それを成り立たせる基盤としての地域が具体的にはどのように変容しているかを探究することが求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学校統廃合が地域にもたらす影響を、具体的な変化の実態に則して明らかにすることである。これまで観念的に捉えられてきた学校統廃合の影響を可視化するために、学校統廃合の実施が地域の表現形式をどのように変化させて、地域の活動体系をどのように再編させたかを明らかにする。さらに、学校統廃合の影響を可視化することによって、学校統廃合後のコミュニティの再設計をどのような構想で描くかについて検討する。

3. 研究の方法

第一に、地域の表現形式の代表例として校名および校歌に着目した。学校統廃合の実施と校名・校歌の変更状況について全国的なデータを得るため、統合対象校と市区町村教育委員会に郵送調査を行った。

そのうち、特徴的な事例を複数選定して現地調査を実施した。現地調査では、校歌づくりの過程に関わった学校と地域の関係者に聞き取り調査を実施した。加えて、新旧の校歌にうたわれている歌詞の変質について分析した。

第二に、地域の活動体系をめぐっては、学校統廃合の前後において、地域行事の運営方法や開催方式がどのように変化したかにつ

いて究明した。全国から特徴的な事例を複数選定して、現地調査を実施した。

また、一部の事例については、研究期間全体を通して定点観測を実施した。ここでは特に、地区公民館や廃校を拠点とした地域再生の取組に着目して、そのような実践を支えてきたキーパーソンに対する聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

本研究では、学校統廃合が近年行われた地域を対象として、全国的な郵送調査と現地調査を実施したことによって、次に挙げる事項を明らかにした。

(1) 学校統廃合による地域表現の変容

第一に、学校統廃合にともなう地域の表現形式の変容については、校歌を対象とした研究を中心に進めた。この研究により、学校と地域に関わる多様な主体が、学校統廃合後の地域の表現形式に教育的な意図を組み込もうとする動きに着目した。

近年、学校統廃合を実施する際、統合校の校歌の作詞や作曲を詩人や音楽家に依頼するケースが少なくなり、昭和期に作られた校歌とは歌詞や曲調が異なる新たな様式の校歌が生まれている。学校統廃合によって学区が再編されるなかで、学校と地域に関する多様な立場の人々の持つ多様な意図が、対立と調整の過程を経ながら一つの校歌に組み込まれていくダイナミズムを描き出した。

(2) 学校統廃合による地域活動の変容

第二に、学校統廃合の実施による地域の活動体制の変化については、地域活動を継続できなくなったり運営体制を変更せざるを得なくなったりする事例が少なくない。そのなかで、閉校後に新たな地域活動を創造した事例があることに着目した。

研究対象として取り上げた事例では、学校統廃合の計画検討過程への地域住民の参加が閉校後の地域づくりの取組に連続していく動きを捉えた。特に、閉校後の地域づくりを考えたとき、閉校に向けた最後の学校経営と地域参加のありようが重要な過程であることを指摘した。学校をどう閉じるかという過程が閉校後の地域をどう維持するかという過程に接続しているという視点を提起した。

(3) 学校統廃合による地域の再設計

第三に、学校統廃合にともなう地域の再設計を検討するうえで、市町村合併と学校統廃合が進むなかでの学校と地域の連携の様相を明らかにした。

研究対象として取り上げた事例では、市町村合併の前後を通して地域で積み重ねられてきた芸術文化活動の意義が確認された。学

校統廃合の実施にともなって、子どもの教育環境は大きく変化するが、この事例では、地域で長年培われてきた芸術文化活動が子どもの教育環境の変化を緩衝する役割を果たしている構図が捉えられた。

さらに、地域の芸術文化活動の蓄積が、統合校としてより大きくなった学校規模で実施可能な新たな教育活動を創出することに寄与していた。学校と地域の再編が進みつつも、両者の関係を断絶せず結び直すことができた動きの根底にあるものとして、芸術文化活動の蓄積と継承を位置づけた。

以上を踏まえて、学校と地域の連携に向けては、その基盤となる体制を構築するのみならず、基盤が成り立つ土壌である文化活動を社会教育の取組として培っていく必要性があると提起した。

(4) 学校統廃合後のコミュニティの構想

以上を通して、学校統廃合後のコミュニティの構想にあたって、次の知見が得られた。

まず、学校の廃止を地域の消滅に直結させないためには、旧学区と新学区を複層的な構造として持続させていくことが重要であると指摘した。さらに、学校教育の体制が少子化の動向を受けて揺らぐなかで、社会教育の体制については地区公民館等を拠点にモジュール化して自律的な整備を進めていくことが持続可能な地域づくりに向けて重要な方策であることを提起した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 丹間康仁・大蔵真由美・竹井沙織・大村隆史「芸術文化活動からみた学校と地域の再編・連携の様相 合併地区での学校統廃合の動きを踏まえて」『日本学習社会学会年報』第13号、2017年、pp.70-79 (査読有り)
- (2) 丹間康仁「地域づくりを視野に入れた極小規模校の経営と学校統廃合」『日本教育経営学会紀要』第58号、2016年、pp.101-107 (査読無し)
- (3) 丹間康仁「学校統廃合にともなう校歌の決定過程と活用方策 統合校の学校づくりへの参加を踏まえて」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第62巻1号、2015年、pp.31-41 (査読無し)
- (4) 丹間康仁「音楽の共有がむすぶ市町村合併後と学校統廃合後の地域づくり 松本市四賀地区におけるコミュニティソングの創造」『松本市調査実習報告書』第6号、2015年、pp.99-101 (査読無し)

〔学会発表〕(計7件)

- (1) 丹間康仁「校歌に込める教育的意図の対立と調整の構図 作詞・作曲をめぐる協議過程の分析」日本教材学会 第29回研究発表大会、2017年10月22日、聖徳大学
- (2) 丹間康仁・竹井沙織・小宅優美・橋田慈子「高校のない山間へき地出身者の進路選択と地域認識 学校統廃合を経験した子どものケーススタディ」日本教育学会 第76回大会、2017年8月26日、桜美林大学
- (3) 丹間康仁・大蔵真由美・竹井沙織・大村隆史「芸術文化活動からみた学校と地域の再編・連携の様相 合併地区における学校統廃合の動きを踏まえて」日本社会教育学会 第63回研究大会、2016年9月17日、弘前大学
- (4) 丹間康仁「学校統廃合をめぐるコミュニティ・レジリエンスの学び 閉校地区の公民館に焦点を当てて」日本教育学会 第75回大会、2016年8月24日、北海道大学
- (5) 丹間康仁「過疎化の進む山間集落における住民の生きがいのづくりの過程 創作活動の意味変容に着目して」日本福祉のまちづくり学会 第19回全国大会、2016年8月7日、函館アリーナ
- (6) 丹間康仁「人口減少社会の課題先進地における地域活動の創造的展開 学校統廃合後の地域づくりに着目して」日本教育学会 第74回大会、2015年8月29日、お茶の水女子大学
- (7) 丹間康仁「学校統廃合にともなう校歌の決定過程と指導上の工夫」日本教材学会 第26回研究発表大会、2014年10月19日、中部大学

〔図書〕(計1件)

- (1) 丹間康仁『学習と協働 学校統廃合をめぐる住民・行政関係の過程』東洋館出版社、2015年、全242ページ

〔産業財産権〕

- 出願状況(計0件)
取得状況(計0件)

〔その他〕

- (1) ホームページ：
<http://researchmap.jp/tamma/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

丹間 康仁 (Yasuhito TAMMA)
帝京大学・教育学部・講師
研究者番号：10724007

(2)研究協力者

- ・大蔵 真由美 (Mayumi OKURA)
東海学院大学・短期大学部・講師
- ・大村 隆史 (Takashi OMURA)
名古屋大学・博士後期課程・大学院生
- ・小宅 優美 (Yumi OYAKE)
筑波大学・博士後期課程・大学院生
- ・竹井 沙織 (Saori TAKEI)
宇都宮大学・基盤教育センター・特任助教
- ・橋田 慈子 (Nariko HASHIDA)
筑波大学・博士後期課程・大学院生，
日本学術振興会特別研究員